

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23560768

研究課題名(和文) 中世阿弥陀信仰の建築造形とその思想的背景についての研究

研究課題名(英文) A Study on Building molding of the Middle Ages Amitabha faith and background on thought

研究代表者

富島 義幸 (tomishima, yoshiyuki)

京都大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80319037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：浄土教中心史観のもと、「浄土教建築」として密教建築と対置されてきた阿弥陀堂を主たる研究対象とし、その空間構成やそこでの法会などから「浄土教」概念の問題点を明確化するとともに、顕密仏教なかでの阿弥陀信仰の位置づけの方向性を示した。さらに阿弥陀信仰の造形は、両界曼荼羅や弥勒信仰など顕密の多様な信仰との関わりのなかで、阿弥陀堂という個別の建築の枠をこえて、伽藍や都市、自然環境へと展開していたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study is main by the pure land architecture including the Amitabha hall; study it. These buildings had been contraposed against esoteric Buddhism architecture, but, from the space constitution and the Buddhist ceremony, I clarified the problems of the "Jodo sect" concept and showed positioning of the Amitabha faith in the Buddhism in the middle ages. The Amitabha faith associated with a variety of faith of other denominations except esoteric Buddhism and the esoteric Buddhism including a two worlds mandala and the Maitreya faith, and the Amitabha faith went over the frame of the individual building and Buddhist monastery and a city, the molding of natural environments.

研究分野：日本建築史

キーワード：阿弥陀堂 浄土教 密教 平等院鳳凰堂 無量光院阿弥陀堂 浄土寺浄土堂 両界曼荼羅 阿弥陀曼荼羅

1. 研究開始当初の背景

平安時代の阿弥陀堂建築をみていくと、そこには多くの密教要素を見いだすことができる。法界寺阿弥陀堂のように、仏像と柱絵からなる阿弥陀堂空間が密教の両界曼荼羅にもとづいて構成されているもの、法勝寺阿弥陀堂のように、本尊である九体の阿弥陀如来像を本尊として、九壇阿弥陀護摩という密教法会が修されたものなど、阿弥陀堂には密教の根本的ともいえる関わりが認められる。この事実は、明かに密教と浄土教を対置する通説と矛盾しているが、建築空間のこうした現象は日本史学や仏教史学では見落されてきた。

さらに、浄土教建築と呼ばれる建築の空間には、浄土信仰にもとづく要素と密教要素が造形においても融合している。しかし、密教を浄土教と区分・対置する視点から作品を分析・評価してきたこれまでの建築史学では、こうした融合現象を明確に位置付けることはできておらず、ひいては現存する建築遺構に正当な評価が与えることもできていない。

2. 研究の目的

中世の阿弥陀信仰の造形については、建築史学・美術史学など広い分野において、「浄土教」という概念をもって膨大な研究が蓄積されてきた。しかし、黒田俊雄氏によって顕密体制論が提唱されて以降、その歴史的な位置付けの再考が求められている。本研究は、建築空間を読み解くという建築史学独自の方法を基盤として、美術・仏教・文学などの阿弥陀信仰にかかわる多様な要素を包括的に取り込むことで、従来の「浄土教」という概念・枠組をこえた重層的な信仰の実態を読み解くとともに、顕密の諸要素を包括して、阿弥陀信仰にかかわる建築に正当な評価を与える、新しい建築造形論の基礎を築くことを目的としている。

3. 研究の方法

阿弥陀信仰の造形は、阿弥陀堂などの建築、その本尊である阿弥陀如来の彫刻はもちろん、柱絵・壁画、ときには建築をとりまく庭園や自然環境とし一体になって形づくられてきた。とくに阿弥陀堂においては、周辺の自然環境を一体にした、ダイナミックな構成にも大きな特徴がある。平等院鳳凰堂は、宇治川や都のある対岸を一体にすることで、宇治の地に浄土と現世とつなぐ景観を構成していた。また、堂内に夕日を取り込んで阿弥陀来迎をあらわした浄土寺浄土堂、夕日を望む「極楽の東門」といわれた四天王寺西門など、周辺環境をふくめることで、阿弥陀信仰の環境造形の理念としてのゆたかな側面がみえてくる。

一方、本尊をはじめ堂内に描かれた諸尊の図像からは、造形の思想を読み取ることができる。ここで注意すべきは、たとえば阿弥陀如来像の説法印や定印、来迎印などの印相はそれぞれに意味をもつのであるが、そこにはそれ以外の意

味も重層的に重ねられていた可能性が考えられることである。本研究ではこうした課題を解決すべく、以下の方法をもって研究を進めていく。

(1) 建築造形の意味の解明

美術作品からの検討

阿弥陀信仰とかかわる美術作品として、阿弥陀浄土図、阿弥陀来迎図をはじめ、密教の両界曼荼羅、阿弥陀曼荼羅など多様なものがあり、これらは阿弥陀堂の造形と信仰の関係を考えるうえできわめて有用な史料である。また、平等院鳳凰堂仏後壁画や金戒光明寺蔵地獄極楽図などには、当時の人々が思い描いた阿弥陀如来の極楽浄土と現世とをつなぐコスモロジーが反映されていると考えられ、建築・伽藍、そして周辺環境からなる空間を読み説くうえで有用な研究材料といえる。

経典・儀軌からの検討

浄土教の代表的経典である『観無量寿経』は、密教の『無量寿如来観行供養儀軌』に引用されるなど、密教における阿弥陀信仰にも大きな影響を与えた。「浄土教」と密教とは、そもそも同じ阿弥陀信仰のコスモロジーを共有していたことが考えられる。『無量寿如来観行供養儀軌』などの密教系の儀軌や『覚禅鈔』・『阿娑縛抄』などの密教図像集から、顕密が融合した阿弥陀浄土信仰のあり方を解明する。

(2) 法会から読み解く建築空間の意味

法会の分析

中世の阿弥陀堂では、じつに多様な法会が修されていた。同じ阿弥陀如来像がときに顕密法会である読経、あるいは不断念仏の本尊となり、また別の時には密教修法である阿弥陀護摩の本尊となっていた。建築や本尊の形式のみからでは、その意味のすべてを読み解くことはできない。法会の分析から、建築空間やその本尊である仏像がもつ、多様かつ重層的な意味・性格を明らかにする。

建築指図・聖教の活用

これまでの中世の寺院建築史研究では、史料として主に寺院の資財帳や供養記などの記録類が活用されてきた。これにくわえて法会の次第を記した記録や法会指図、教義について記した儀軌・口訣などを参照することで、より建築空間や造形の意味がより具体的に明らかになることが期待される。近年、寺院に秘蔵されてきた聖教が盛んに調査・公開されてきており、聖教を積極的に活用することで、新たな仏教建築史研究の道が開かれつつある。

(3) 研究の総括

以上の研究の成果を総括し、いわゆる「浄土教建築」は中世の建築のなかで如何に位置付けられるのか、さらに「浄土教」なる概念は具体的に如何なる意味をもつのか再検討し、中世の阿弥陀信仰の造形を広くとらえる論理の構築を目指す。

4. 研究成果

(1) 中世阿弥陀信仰の造形と信仰の関係についての個別事例の調査・研究において、以下のような成果を得た。

美術作品の調査研究：岩手県の松川二十五菩薩像（平安時代）の調査をおこない、阿弥陀聖衆来迎の建築空間の構成理念の一端を明らかにし、また醍醐寺蔵阿弥陀三尊像（鎌倉時代）の調査により、密教における阿弥陀信仰の造形の実態について検討した。さらに、錐点をもつ仏像の造像手法についての調査研究のなかで、三重・妙福寺の2体の金剛界大日如来像について検討し、それらのうちの一号像が平等院鳳凰堂阿弥陀如来像ときわめて近い型をとっていることを明らかにし、平安時代の阿弥陀堂の重要な空間構成要素である阿弥陀如来像の造形的特質や手法の一端を推定した。この成果は、富島義幸「錐点から見た平安時代後期の造像修法の一側面」として公表した。

無量光院阿弥陀堂の復元的研究：平泉の無量光院をはじめ毛越寺の発掘現場における調査を継続し、庭園をふくめた阿弥陀浄土の建築造形の復元的検討をおこなった。とくに無量光院阿弥陀堂については、CGによる伽藍復元をおこない、浄土信仰の造形を、建築としてはもちろん、この伽藍を特徴づける周囲の土塁や背後の山並みなどをふくめた都市史的な視点から、環境造形としてとらえなおすべく検討した。その成果の一部は、京都を中心としたこれまでの浄土信仰についての研究成果をあわせ、岩手県教育委員会・平泉町ほかの依頼による「平泉」拡張に係る国内専門家会議「基調報告（富島義幸「平泉における「浄土世界」の可能性と課題）」、「平成25年度「平泉」の拡張に係る研究集会」報告（富島義幸「都市平泉と浄土信仰」）として発表し、世界遺産としての平泉の再評価にむけての学術的な基盤づくりに貢献した。

浄瑠璃寺伽藍の研究：現存唯一の九体阿弥陀堂を擁する浄瑠璃寺について、その伽藍の再検討をおこなった。その結果、これまでの通説である園池を中心に、その西に阿弥陀如来像を安置する本堂（九体阿弥陀堂）、東に薬師如来像を安置する三重塔が、西方極楽浄土・東方浄瑠璃世界という仏教的世界観の方位にもとづいて配置された構成という理解に対して、三重塔が建立された当初安置仏は釈迦であり、また通説では法華経曼陀羅とされてきた壁画の主題も、じつは釈迦八相図で、この三重塔は釈迦・法華信仰にもとづく塔であったとする新説を提示した。さらに、浄瑠璃寺に残る平安時代後期の大日如来像が安置された仏堂について検討し、真言堂（秘密莊嚴院）の本尊であった可能性の高いことを示し、いわゆる「浄土教伽藍」とされる伽藍における、顕密仏教の理念のあり方の一端を明らかにした。この成果は富島義幸「浄瑠璃寺伽藍再考」として発表している。

浄土寺浄土堂の造形と重源の思想：重源の阿弥陀信仰は、これまで中国の宋の仏教との

関係が注目されてきたが、浄土寺浄土堂の造形と重源の仏教的な事績について詳細に再検討し、そこでは日本中世の顕密仏教が重要な意味を持っていたことを明らかにした。本研究の成果の一部は、富島義幸「重源・栄西の建築革新と伝統」（狭山池シンポジウム2014）などとして口頭発表した。

(2) 中世仏教における阿弥陀信仰の位置づけをおこなう基盤を築くべく、広く中世顕密仏教をとらえるための研究をおこない、その成果を富島義幸「建築と景観の統合 中世顕密主義のコスモロジーと両界曼荼羅」、富島義幸「塔・曼荼羅・王権 法勝寺八角九重塔と相国寺七重塔の意義をめぐって」、富島義幸「日本中世における灌頂・修法空間の展開」などの学術論文として発表した。さらに、本研究の最終年度である2014年には、研究を総括するとともに、浄土教中心史観の問題点、密教と阿弥陀信仰の関係、中世仏教における浄土教の位置づけについて検討した成果を、富島義幸「阿弥陀信仰の造形と顕密仏教「浄土教」概念の再検討」（第3期第5回日本宗教史懇話会サマーセミナー）として口頭発表した。本発表では、中世の阿弥陀信仰が、両界曼荼羅を基盤として顕密の多様な信仰が重層する中世顕密主義のコスモロジーのなかに位置づけられる可能性など、今後の研究の展望にも言及した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

富島義幸、錐点から見た平安時代後期の造像修法の一側面、日本宗教文化史研究、15-1、2011、pp53-68

富島義幸、浄瑠璃寺伽藍再考、仏教芸術、318号、2011、pp13-42

〔学会発表〕（計8件）

富島義幸、塔・曼荼羅・王権 法勝寺八角九重塔と相国寺七重塔をめぐって、仏教文学会2011年9月例会、於摂南大学大阪センター、2011年9月17日

富島義幸、平泉における「浄土世界」の可能性と課題、主催岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会、於平泉文化遺産センター、「平泉」拡張に係る国内専門家会議基調報告、平泉文化遺産センター、2012年10月17日

富島義幸、経典に説かれない信仰世界 建築空間から読み解く中世のコスモロジー、科学研究費補助金基盤研究(A)「中世宗教テキスト体系の総合的研究 寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合」研究会「密教空間の諸問題」、於名古屋大学文学研究科、2013年7月16日

富島義幸、阿弥陀堂と密教 浄土教中心

史観への疑問、科学研究費補助金基盤研究(A)「中世宗教テキスト体系の総合的研究 寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合」研究会「密教空間の諸問題」、於名古屋大学文学研究科、2013年7月16日

富島義幸、都市平泉と浄土信仰、平成25年度「平泉」の拡張に係る研究集会、於一関文化センター、2013年11月23日

富島義幸、阿弥陀浄土信仰の造形と環境 平等院鳳凰堂と浄土寺浄土堂の宗教的意味を中心に、九州大学大学院芸術工学研究院 環境デザイン部門 建築史学・文化財学講座 ミニシンポジウム「環境と宗教」、於九州大学芸術工学部(大橋キャンパス) 2014年2月15日

富島義幸、阿弥陀信仰の造形と顕密仏教「浄土教」概念の再検討、第3期第5回日本宗教史懇話会サマーセミナー、於白浜荘、2014年8月21日

富島義幸、重源・栄西の建築 革新と伝統、狭山池シンポジウム 2014、於SAYAKAホール、2014年11月8日

〔図書〕(計8件)

京都市文化市民局、京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度、富島義幸、法勝寺八角九重塔の復元について、2011、pp194-209

総本山醍醐寺編、勉誠出版、醍醐寺叢書 史料編 建築指図集 第一巻、2012、p201

岩手県教育委員会・一関市・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編、「平泉の文化遺産」の世界遺産追加登録に係る国内専門家会議会議録、富島義幸、平泉における「浄土世界」の可能性と課題、2013、pp15-26
苅部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編、岩波書店、岩波講座 日本の思想 第七巻 儀礼と創造、富島義幸、建築と景観の統合 中世顕密主義のコスモロジーと両界曼荼羅、2013、pp93-141

土生田純之編、吉川弘文館、事典 墓の考古学、富島義幸、葬送と阿弥陀堂、2013、pp402-407

岩手県教育委員会・一関市・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編、日本都市史のなかの平泉 平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会報告書、富島義幸、都市平泉と浄土信仰、2014、pp68-73
長岡龍作編、竹林舎、仏教美術論集5 機能論、富島義幸、塔・曼荼羅・王権 法勝寺八角九重塔と相国寺七重塔の意義をめぐって、2014、pp44-65

森雅秀編、法蔵館、アジアの灌頂儀礼 その成立と伝搬、富島義幸、日本中世における灌頂・修法空間の展開、2014、pp226-251

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
富島義幸(Tomishima Yoshiyuki)
京都大学・工学研究科・准教授
研究者番号：80319037

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし